

綺麗なテーブル

毎日新聞特別編集委員 梅津時比古

最近、どこの事務所も綺麗になった。

私の立ち寄る企業のいくつかも、時流に合わせたのであろうか、内部の装いを変え、すっきりした。

不思議なことに、スマートなオフィスには、昼も人の姿があまりない。会議もパソコンのオンラインで行い、人が集まる必要がないのかもしれない。

驚くべきは、雑然としていることをむしろ誇っていたような、出版社や新聞社の内部も変化していることである。

かつて出版社や新聞社に見たものは、地震の直後に資料が崩れてきたのかと見紛うような机棚…。椅子に座っている人は資料に埋もれて向かいの机から見えず、互いに立って連絡し合っていた。論争になると全員が立って意見が飛び交う。明らかにタバコの火を揉み消したと分かる茶色の焦げ跡が床に点々と刻まれ、ビールをこぼした泡の染みが広がる…。

電話が四六時中鳴っていたが、はた目には受話器がどこにあるのか分からない。その椅子に座っている人だけが、手品のように資料の山の中から受話器を探し出し、耳に当てていた——と、まるで他人事のように書いたが、これはかつての自分の姿でもある。

驚くべき二つめは、学校もまた綺麗になっていることである。以前は門を入ると（ここでのチェックが最近は厳しい）、小・中学校では入口に下駄箱（靴箱、更には最近、シューズボックスと言らしい）が並び、高校・大学では、そのまま一直線に教室が連なっているイメージが

強かった。

ところが、いまや入り口にホテルのロビーのような空間を持つところがいくつもある。そこでコンサートも開かれ、それはそれで素晴らしいことだが、大学によってはブランドのカフェが併設されているところもあり、改めて激変ぶりに驚く。図書館では広いテーブルが美しい姿を見せ、デザイナー的に配された丸いソファで、三々五々、自由な姿勢で本を読んでいる。

どうやら、新しいオフィスや学校などのアルカディア（理想郷）は、物ひとつ無い、広くなめらかなテーブルに象徴されるのかもしれない。緑の植物などが配されたテーブルは、常にしゃれた形を浮かび上がらせている。

あるオフィスを一緒に訪れた友人が「エセ・IT企業のようなだね」と小声で毒舌を吐いた。「確かに」と笑ったが、毒舌で笑わせることを特技としてどこでも遠慮しなかった人が、小声にならざるを得ないところに、綺麗なテーブルの「力」を見る気がした。

さまざまな業種、規模の大小を問わず、綺麗なオフィスは、たいてい白かウッドのテーブルに、ドアの無い区画、会社によってはソファに見える椅子もあり、夜、無人の共有テーブルに間接照明が当たる様は、宇宙船のよう。ネットには、IT企業のおしゃれなオフィスをベスト10にした企画もある。

オフィスを綺麗にするには、テーブルに自分の固有のスペースを禁じ、皆の共有スペースにするのが、必定のようだ。つまり、私的所有は禁止される。

考えてみれば「私的所有の禁止」は、共産主義が歴史的に抱えてきたイメージではないか…。それが、資本主義の先端企業に具現化されている。反対に、共産主義国家の最上級層の私的所有はすさまじい。

2025年が明けた。世界における激動が、新年に一斉に訪れている気がする。

最大の要素は、トランプ米国第47代大統領の就任であろう。もちろん、これは予定されていたことではあるが、やはり、唐突感が襲ってくるのは否めない。

就任するやいなや、驚くべき大統領令の乱発！ テレビはそれを伝えながら、トランプ大統領が「追放する」と明言している移民が黙々と働く映像、トランプ大統領支持者の以前の米国国会議事堂への乱入事件、ガザの惨状などを流している。

続いてプーチン大統領がテレビに映った。こちらにも、強引さにかけては引けを取らない。背景の映像には、ウクライナで倒壊して鉄筋が露出し、黒焦げた爆撃跡がアップされる。しかし新しい映像なのに、どこか既視感に襲われる。こういう状況を見慣れるとは、どれほど異常なことなのか。

米中の対立がテレビのテーマだったのか、続けさまに中国の習近平国家主席、北朝鮮の金正恩最高指導者が映った。

居丈高な言葉を吐く彼らの見慣れた映像に触れながら、彼らが命令をくだす、あるいはインタビュを受けるテーブルに目がいき、ふと不思議な感じがした。綺麗なテーブル、あたかも新しいオフィスのテーブルを見ているような気がしたのである。